

しゃべり上手は 聞き上手

落語家 桂 歌丸

昭和二十六年の入門から半世紀以上、
噺家をやつてきて思いますのは、言葉で
相手を怒らせたり泣かせたりすることは
簡単ですが、笑わせるということ、つま
り相手の心を引き寄せる話し方というの
はとても難しいことです。何が難
しいかといえば、まず「間」の取り方
でしょうね。登場人物がしゃべる一つ一
つの言葉の「間」、それから、登場人物ど
うしの会話の「間」です。

落語というものはまさに「間」がもの
をいう芸。聴く側のお客様にとってはそ
れが大きな魅力であり、われわれしゃべ
るほうにとつては、自分なりの「間」を
つかままでが大変なところですよ。「間」
が悪いと、どんなに筋が面白い噺でもお
客様に笑っていただけません。ところが、
「間」がいいと、ちよつとしたことでも
どつとつける。不思議なものです。

わたくしたち噺家は、まず弟子入りし

いちばんの勉強法は人の話をよく聞くこ
と、つまり「聞き上手」になることじゃ
ないかと思っています。よく「しゃべり
上手」ということをいいますけれど、わ
たしはそうじゃないと思います。「聞き
上手」というのがもとにあるんです。人
の話を聞くのがうまい人は、しゃべらせ
ても大変うまい。相槌を打つたり、うな
ずいたりしながら、相手に気持ちよく
しゃべらせる「間」をとれるんですね。
これはわたしたち噺家がよくやる稽古
ですけど、テレビやラジオのニュース
を聞きながら相槌を打つんです。アナウ
ンサーがニュースや天気予報を話してい
るとき、画面に向かって「ああ、そうで
すか」「わかりました」なんてね。たつ
た一言二言ですけど、相手の話に合わ
せながら間をとることが自然に身につい
てくるんです。わたしも昔はずいぶんや
りましたよ。

て師匠に口伝えで噺を教わるところから
始まります。最初のうちは師匠の口まね
ですから、「間」も師匠のとおりの「間」
なんです。それが生涯そのままでの「間」
なんですが、それが生涯そのままでの「間」
じゃないんです。やがては、自分に
合った「間」をこしらえなくつちやいけ
ません。

今、うちの弟子をはじめ、よそのお弟
子さんもわたしのところに稽古に来るん
ですが、わたしは噺を教えることはで
きなんですけど、「間」を教えることは
できないんですよ。人によって全部違
いますから。明らかに間違つた「間」なら
「そこは、一呼吸おきなさい」とか、「そ

落語というものが、減びもせず延々と
続いてきたのは、こうした話し方の工夫
をたえず磨いてきたことがひとつ。それ
に加えて、常に言葉づかいの工夫をして
きたことも大きいでしょうね。

われわれ東京の落語家は、江戸の言葉
でしゃべります。古典落語は、その当時
のままの言葉を使ってこそ味わいがあり
ますから。しかし、時代とともに言葉が
わかりにくくなつてくれば、現代風に改

こは間をおいちゃだめだ。すつと一気に
しゃべりなさい」などとアドバイスはで
きますけれども、その人に合った「間」、
つまり本当の「間」というものはちよつ
と教えられないですね。

たとえば昭和の名人といわれた古今亭
志ん生師匠(※)の「間」はとても面
白いけれど、わたしたちがまねしてやっ
てもお客様は絶対笑わない。あれは志ん
生師匠の「間」なんです。「間」によつ
て噺が面白くもなり、つまらなくもなり、
噺がうまくもなり、下手にもなるんです。
人を笑わせたり、こちらの話をちゃんと
聞いてもらえるための「間」というのは、
一朝一夕に身につくものではありません。
ですから、これは噺家ばかりにいえるこ
とではないんですけど、自分の「間」
を早くこしらえた人が勝ちになるんす
よね。

じゃあどうすれば身に付くかといえば、

めてもいます。カットできる言葉ならス
パッと切り捨てる。どうしても使わなけ
ればないときは、噺の中でそれとなく説
明する工夫をします。

変えることも、変えないこともどちら
も大事。先人たちによるそうした努力に
よつて、芸が伝承され、言葉が伝承され、
落語は「笑い」や「人情」を長い間伝え
てきたのです。

落語には味わいのある日本語や、今も
通じる義理人情の道理というものが残つ
ています。間の取り方の勉強もできます。
落語こそが日本語の教科書です…とまで
は申しませんが、ぜひ寄席や落語会にお
いでいただいて、大いに笑ってください。

(談)

※古今亭志ん生(五代目)一八九〇年〜一九七三 軽妙洒
脱、天衣無縫の芸風で人気を博した。

桂 歌丸

1936年、神奈川県横浜生まれ。
落語家。社団法人落語芸術協会会長。
51年、五代目古今亭今輔に入門のち、
四代目桂米丸門下に移る。68年、真打
昇進。
94年から三遊亭圓朝作の長編人情噺に
取り組むなど、人気・実力ともに当代随
一の名手として知られる。
89年、芸術祭賞、2005年、芸術選奨
文部科学大臣賞ほか受賞多数。
著書に『極上 歌丸ばなし』(うなぎ書房)
など。

